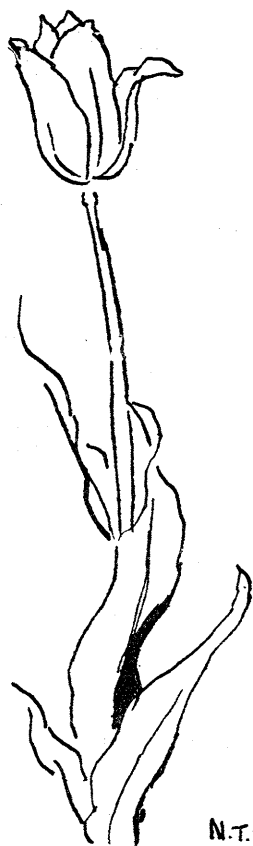


## 近頃感じたことの二つ三つ



N.T.

斎藤文雄

### 保母養成

文部省に大学設置審議会というのがあつた。年に何回か呼出しをうけて、新しく申請のあつた大学の講座の構成とか、職員組織の適否とか、そういうことを審議するところである。その会に出て近頃目立つのは、いわゆる短大の保育科設置申請が断然多いことである。ここでその内容について申述べるつもりはない。ただ、やがて全国的に、若い保母さんたちが群をなして卒業してくるであろう壮観を思いうかべながら、些か感じたことを述べてみたいのである。

戦後は、どこに住んでいても生活はらくでない。しかも忙がしい。夫婦共稼ぎが多くなる。せめて子供だけ昼間遊ばせてく

れたらという保育所に対する要望は、今日では日本中の痛切な問題となつてゐる。一方では、教育という立場から、子供の健全な心身の発育を念願して二年制、三年制といった幼稚園に通学させたいという家庭の希望も、文字通りめざましい要望である。こどもというものをここまで考えるようになった社会的傾向、これは吾々としては誠にうれしいことであり、むしろもつともつとこの氣運の醸成には拍車をかけなければならない。

さて、その意味でたくさんの保母が育成されるのは有難いことであるが、これらの保母の受入れ態勢はどうだろう。保育所のことはしばらくおくとして、幼稚園だけを問題としても、本誌（第五十四卷第十一号）で報告されているように、その数の増加は著しい前進ぶりである。幼稚園がふえ、そこで働く保母が

ふえる、誠に当然で需要供給の摂理に叶った数学的見解であるが、私がいいたいのは数のマツチという点ではない。数の増加ということのみが妥当と考えて安閑としておられるだろうかということがある。今日の幼稚園をみると、いかにも商業政策、即ち先ず算盤を弾いてその基盤の上に幼稚園が経営されるような傾向が、そちらこちらで見られている。幼稚園は経営として有利である、相統税もかからないから助かる」と公言する人すら出てきている。設備に対する収容人員、収容人員に対する保母の数、保母の待遇、母の会の負担など、それこそ千差万別、これでは真面目な幼稚園は立つ瀬がないのではなからうか。真面目な保母ほど明朗さを失うことにならないだろうか。

もう戦争の痛手を口にすべき時は過ぎた。ここで、幼稚園のあるべき正しい姿を是正しなかつたら、幼稚園の風格というものも永遠に浮びあがれない淵に陥つてしまうであろうことを心配する。それよりも、次々と卒業してくる保母たちの純な心をゆがめてゆくようなことがあつたら、それこそ魂のない建物ばかりの幼稚園になってしまう。カリキュラムがどうの、保育技術がどうのと、そういう方面は微細にわたって研究され学問の向上を目ざしているようであるが、土台がぐらつて来たのにそんなことばかり考えていいものだろうか。

それは文部省の仕事であつて、本誌の読者の方々の仕事ではないという考え方もあるかも知れない。しかし文部省というような役所は私たちが作っている役所なので、その役人は私た

ちに仕えている人々である。私たちが真剣に取りあげることが根本で、それに文部省にも協力してもらうことが本筋だと思ふ。幼児の問題は私たちの問題である。その幼児の教育に重大な影響がありそうな現状の次に来るものは保母に対する影響である。新らしく出てくるたくさんさんの保母たちを多少でもスポイルするようなことがあつたら、病はもう膏肓に入った時と考えられる。癌はその芽生えを摘出すれば生命をとられるようなこととは異なる。幼稚園のあり方については、ここで手術する必要があるのでないかという気がする。門外漢の私のことであるから見当違いがあることは私も認める。しかし、少くも門外漢としてこんな考えをもっていることだけは訴えておきたい。

## 入 学 試 験

子どもを持つ親として、自分の子どもを少しでも親以上の恵まれた子どもに育てたいという願ひは当然である。ところが親は、盲目といわれるかも知れないが自分の子の能力は過剰評価しがちである。その辺の是正もあつて近頃は都会地なら先ず、小学校でも幼稚園でもテストということをやる。そのテストを上手にパスしたいばかりに、またその下請のテストをうける。

四、五年前までは結構なことと考えていたが、本年などの傾向をみると、正に病的である。母親がテスト病にとりつかれると、子どもは、何の意味もなく甲のテスト場から乙のテスト場と引つぱり廻されて、「それ僕前にやったから知ってる」と

いつたようなことになつてくる。

吾々の研究所でも、乳児幼児の教養相談は前からやつているが、吾々の初志は正しい導きを念願としており、長い期間定期的にうけてゆく子と、問題児として臨時的に指導をうける子と二通りである。ところが、秋風が吹いてくる十月ごろになると明らかに小学校や幼稚園志願のためのテスト希望者が殺到する。中には試験の場ならしにというつもりで子供をつれてくるテスト病患者もいて、教養部の先生の顔をしかめさせることもあるようである。

幼児教育、幼児心理学の発達とともに、信頼するに足るテスト法が段々と完璧に近いものに近づきつつある功績は買われてよからう。しかしながらテストが唯一の方法であり、テストが万事を解決するという考えのみで処理する人々が万一にも出てきたら、それは行き過ぎではなからうか。児童心理学者の中にも、この点に論及しておられる方もあるようだが、私がいいたいのは、それが母親の頭の中でゆがんだ形で消化され、テスト病患者が多くなってゆくかも知れない点を心配するからである。というのは結局その結果として、こまっちゃんれた、うすっぺらな子供ができてくるかも知れないことを惧れる。じつくりとひとつの事を研究的にみてゆくような子供が生れるだろうかということがある。医師という立場からみてもその結果は既に出ている。神経質なことほど、食欲が減り、物に臆し、睡眠が浅くなる。何か母親から狂迫感を受けているように感ぜられる。

私は母親をせめる積りではない、むしろ受入れ側として反省する必要はないかということを提示して、多くの意見がきいたのである。せめて子どもには最少しのんびりと屈託のない生活をさせてやりたいのである。

この間偶然ラジオをきいていたら、ある実業家が、現在東京の実業界をリードしている知名人の大部分が地方人であつて、いわゆる江戸っ子は甚だ少いということであつた。その時考えさせられたのは都会の子と地方の子との体力の差ということであつた。頭だけの仕事をしているのなら都会の方が一歩優れているかも知れない。しかし大部分の仕事というものは頭と体力と両方がつづかない限り、その仕事には限度がある。体力のあるものには腹がある。粘りがある。そうしてみると、結局都会地のこどもほど入学試験にも身体的条件はもつと重視されていいものではないだろうか。弱くてI・Q一〇〇の子より、頑丈でI・Q九〇の子の方が伸びやすい。強制的に練習させられた一時的なつけぬしきのテストに偏重することなく、もつとこどもの体力というものが優先されてもよくなるかと思う。

話は少し脱線するかも知れないが、一度こどもが幼稚園なり小学校なりに入学すると、もうあまり顔出しもしない親がある。こどもの教育も躰げも何もかもやつてくれると考えているのだろうか。先刻母親をせめるつもりはないと書いたが、この点では母親はせめられていい。アメリカの主婦の三つの奉仕、即ち House Service, Church Service, School Service くれ

を目のあたり見て来た私は、なるほどこれなら自分の子が入っている幼稚園でも学校でも、よくなるざるを得ないと感じた。その点日本のこどもの親は充分に学ぶべきである。

## 日 光

終戦前のことであつたが、保母さん達と会をもつことがあつて、その時、戸外保育と室内保育との割合はどれくらいになつていようかということの話があつたことがある。保母さん達のその時のいい分では、戸外保育は天気の良い日でも三分の一しかとれないということであつたのを記憶している。

外国に行つた時、オーストラリアとニュージールランドの英国式と思われる幼稚園を見学する機会があつた。いろいろ聞いてみると、保母さんのいうには、私たちはカリキュラムは持ちません。こども達のリズムにのつてその時々っていくつものグループの遊びを指導しているだけですという。そこで腰を据えて二時間ほど子供の遊びを見学した。お天気がよかつたので写真も沢山とつた。この幼稚園は公立で半日保育の例である。

室内には Play Room がある。中には人形のベットが二台、片方の机はアイロン台で、玩具のアイロンや人形のおむつや白布がのつている。反対側の机は鏡のついた化粧台で、盆にのつた櫛、ローション化粧水などがあり、その机の袖、一段低く玩具の室内電話が備えてある。この部屋は白ベンキの柵でかこまれ、出入口には郵便箱がおいてある。一方の広間にはピアノ、

いつでも画がかけるよう大きい画用紙のはつた画かきの脚が二脚絵具がそえてある。窓よりの柵はすべて絵本と作品、いくつもの丸テーブルには粘土(?)の山がのつている。部屋の外は二間巾ぐらゐのバルコニー、ここでは赤ちゃんの入浴をさせるエナメルのたらいと石鹸、人形は裸身で放り出されて日光浴をしていた。いくつもの皿に砂をもつて、それにいろいろな花がさしこんである。ぬり絵の道具をのせた円卓がある。戸外には、ある工場から貰つたという電線の巻いてあつた大きな木製の輪形、広い砂場、ブランコ、シーソー(地面には自働車の古タイヤを両端にうめて、当りを柔くする)一間に二間ぐらゐの水を張つたエナメルのバットがあつて、舟がいくつも浮いている。こどもの自転車、三輪車、自働車。驚いたことには特別の作業衣とベンキがおいてあり、ある子は壁塗りをしていた。ひるねはバルコニーにマットと毛布をもち出してきて日当でねる。三十五人ぐらゐの子供に保母三人。こどもの遊ぶところを各々がかけ廻つて指導している。

この保育のよしあしはともかく、戸外保育が相当多いのが羨しかつた。カリキュラムにしばられない子供の動きは自然である。のびのびと遊んでいる。その代り保母は大変だろが、体力の差か、少しも疲れたようすも見せなかつた。

私の願ひは、カリキュラムを組むにもあまり細々とした組方をしないで、最少し日本の幼稚園も天気の良い日は主として子供たちに日光の無限の恵みを与えてほしいということである。